

HAIRDYE

Patent Number: JP55022638

Publication date: 1980-02-18

Inventor(s): YAMAGUCHI HARUO

Applicant(s): YAMAGUCHI HARUO

Requested Patent: JP55022638

Application Number: JP19780095693 19780803

Priority Number(s):

IPC Classification: A61K7/13

EC Classification:

Equivalents:

Abstract

PURPOSE: A hairdye capable of dyeing the hair in various colors, consisting mainly of a cationic dye.

CONSTITUTION: A hairdye consisting mainly of a cationic dye, e.g. C.I. Basic Blue 3 of the formula, having a bright color and improved light-fastness. The dye is used as follows: The hair is immersed in an aqueous hydrogen peroxide, pretreated, decolorized, and dyed with the hairdye solution in a bright color. The cationic dye has improved light-fastness compared with the conventional basic dyes, and is not toxic to the hair and skin.

Data supplied from the esp@cenet database - I2

⑯ 日本国特許庁 (JP)

① 特許出願公開

② 公開特許公報 (A)

昭55-22638

③ Int. Cl.
A 61 K 7/13

識別記号
7432-4C

④ 公開 昭和55年(1980)2月18日

発明の数 2
審査請求 未請求

(全 3 頁)

⑤ 染毛剤

⑥ 特 願 昭53-95693

⑦ 出 願 昭53(1978)8月3日

⑧ 発明者 山口春夫

京都市伏見区竹田内畠町153番

地

⑨ 出願人 山口春夫

京都市伏見区竹田内畠町153番

地

⑩ 代理人 弁理士 北村学

明 講 著

1. 発明の名称

染毛剤

2. 特許請求の範囲

- カチオン染料を主成分とする染毛剤
- カチオン染料を主成分とする染毛剤と過酸化水素水を含有する脱色剤との組合せからなる染毛剤セット。
- 発明の詳細な説明

この発明は毛髪を多様な色彩に染めるための染毛剤に関するものである。従来毛髪の染色に用いられたのは酸化性の染料であって、この染料はそれ自身が黒色を呈さないが、毛髪内に投遞した後で酸化反応や縮合反応によって発色し染毛するものである。この場合酸化時間は短縮するために通常過酸化水素水などの発色剤と呼ばれる酸化剤が併用される。

酸化性染毛剤としては主にパラフィニレンジアミンなどの芳香族アミンが使われ、この他に色調

調整剤としてレゾルシン、カテコール、ビロガロールなどが添加される。

この酸化性染毛剤は白髪のカムフラージュ用に広く使用されているが、この種の染毛剤により染められる色は黒色が主体であり、他に栗色など褐色系統の色彩があるだけである。

しかしながら最近スキン・コンタクトの多様化が進むにつれ、多様な色彩への染毛が強く要望されるようになつた。

この発明はこのような要望に応えるものであつて、毛髪を多様な色彩に簡単に染色することのできる染毛剤を提供することを目的としている。この発明にかかる染毛剤は塩基性のいわゆるカチオン染料を主成分とするものである。

塩基性染料は綿維、羊毛、皮革などの染色に古くから使われてきたが、色彩が鮮やかであるかわりに日光に弱く、容易に退色するという欠点をもっていた。この欠点を改善したのがいわゆるカチオン染料であり、その色彩の鮮やかさと日光強さの高さによって注目されていることは周知の

通りである。従来の複基性染料にくらべてカチオン染料の特徴は染料の発色共役系とオニクム基とが個々の絶縁基によって結合されているか又は複素環をもっていることであり、染料の色相や堅ろう性は発色系によって、また錯離との結合はオニクム基によって受け持たれると考えられる。

いずれにしても、このカチオン染料を含む堿基性染料が毛髪の染色に用いられたことはなかった。これはカチオン染料が開発される前の堿基性染料が一般に日光に弱かったこと、及び黒色の毛髪がそのままではカチオン染料を含む堿基性染料で染色されないことの理由によるものと想われる。

最近、発明者はカチオン染料と呼ばれる一連の染料があらかじめ前処理を施した毛髪をよく染色し、その染色された色彩が長期間にわたり安定であること、および毛髪、皮膚などに有害でないことを見出し、これを主成分とする染毛剤を開発した。

この染毛剤について説明すれば以下の通りである。この発明にかかる染毛剤は一連のカチオン染

病の1または2以上を含有し、弱体または液体の形で提供される。これらの他に無機塩をどの濃度を添加しておけば取扱い上便利であり、さらに染毛の効果をあげるために界面活性剤や防水調整剤を添加してもよいが、最も効果的にはカナオニ染料の外でもよい。

使用に際してはこの染毛剤を数パーセントの水溶媒とし、あらかじめ脱色処理を施とした毛髪に塗布するのである。これにより毛髪は鮮やかな色彩に染色される。毛髪に残っている余分な染毛剤は通常の方法でシャンプーして洗い落せばよい。

前処理としての脱色処理は過酸化水素水溶液に毛髪を浸漬することにより行なわれる。この場合過酸化水素水溶液に適当な界面活性剤を添加すれば効果的である。

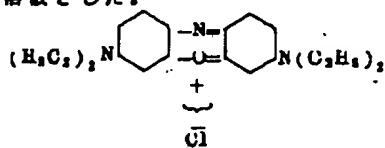
以下に本染毛剤を用いた染毛の実験例をあげて説明する。

(実施例1.)

先ず 6 % 漂白水溶液中に臍髄を約 20 分間前後浸漬し、充分水洗したのちドライヤーで乾

黒した。この開始適により黒髪はほほ象牙色に脱色された。

次に下記の構造をもつ $\text{D}_1, 1, \text{ベーシックブル}-3$ と呼ばれる化合物 (0.1.51004 試験) を主成分とする市販のカチオン剤を熱湯で溶かして 2% 濃度とした。



この薬液をゴム手袋をはめた指で、上記脱色剤を塗とした毛髪に塗布しつつドライヤーで乾かしていくと、ところ毛髪はすぐに青色に染色された。このようにして染色された毛髪を普通に行なわれるような方法でシャンプーし水洗したのち乾燥した。染色された毛髪の色影は鮮やかであった。

(実例2)

実験例1の青色染料のかわりに市販のレッドペイオレット染料を用いて同様な手順で染毛したところ毛髪は鮮やかな赤紫色となつた。

(実 践 例 3)

同様に染料を市販のカチオンイエロー染料にかえて染毛したところ毛髪は鶴やかか葉色とかなり

(寒潮例七)

次に、実施例1で用いた青色染料と実施例3で用いた黄色染料を混合し、これを染料として同様に手順で染毛したところ褐色された毛髪は鮮やかな茶色に着色された。

この例のようにカチオン染料のうちの適当な複数種を組合せて用いることにより多様な色彩への染毛が実しめるのである。

また、染色の方法は前述の如く人手で塗布するだけでよいのであるから毛髪全体を小区分し、各区分ごとに異なる色彩に染めることもできる。上に述べた実施例の他にもカチオンオレンジ染料、カチオンピンク染料など多種にわたるカチオニン染料について染色試験をおこなったが、いずれの場合にも染色された色は6ヶ月を経ても大きな変化を示さなかった。また、毛髪、皮膚などに異状を生じることもなかった。

アクリル繊維、革毛などをカチオン染料で染色する場合は染料を溶かした溶液中にかいて100℃で60分間強度煮沸するのが普通であるが、これはこれらの材料が実用中に洗剤などで洗われることを考慮し、色彩の安定化をはかるために行なわれるものであり、毛髪の場合はそのような必要はない。

従来の酸化性染毛剤で染毛した場合は毛髪は光沢に乏しく、質の通りも良くなかったがカチオン染料で染毛した場合は光沢、質の通りともすぐれている。

染色に際してこれらカチオン染料は毛髪の皮質中のメラニン色素が脱け落ちた空隙に入り込み、それが透明な毛表皮を通して見えるため光沢がすぐれているものと考えられる。

本発明にかかる染毛剤と過酸化水素水を含む脱色剤とをセットとして提供すれば需要家にとって、きわめて便利である。

代理人弁理士北村繁